「日本における薬剤溶出性ステントの長期成績と問題点」

木村 剛[1]　南都 伸介[2]
Takeshi KIMURA, MD, FJCC[1], Shinsuke NANTO, MD, FJCC[2]
[1]京都大学循環器内科，[2]大阪大学先進心血管治療学

薬剤溶出性ステントは再狭窄を劇的に減少させ，日本の実地臨床に定着しているが，ステント血栓症や遅発性再狭窄の克服，再狭窄のさらなる減少など残された課題は多い．これらの薬剤溶出性ステントの遅発性有害事象の克服のためにはその発症機序の解明が必須である．発症機序解明のために最も重要なアプローチは薬剤溶出性ステント留置後の剖検例の病理組織学的検索である．本シンポジウムでは，基調講演を米国CV Path InstituteのRenu Virmani先生にお願いした．Virmani先生は薬剤溶出性ステントの前臨床の動物実験およびヒトの薬剤溶出性ステント留置後剖検例の病理組織学的検索について，世界で最も豊富なデータをお持ちである．病理の視点から第1世代，第2世代の薬剤溶出性ステントの問題点と今後の薬剤溶出性ステント開発の方向性について御講演いただいた．

一方，日本人の大規模レジストリーであるj-Cypher Registryからの報告では，ステント血栓症の頻度や再血行再建の頻度は日本人と欧米人でかなり異なるという知見が得られている．日本人の冠動脈疾患患者治療の方針を決定する上で，日本人のデータを集積することの重要性が高まっている．本シンポジウムでは，日本人のデータとして倉敷中央病院門田一繁先生に自験成績を中心に日本における薬剤溶出性ステントを用いたPCIの現況を御講演いただいた．また東邦大学大橋病院中村正人先生には糖尿病症例に対する薬剤溶出性ステントの有効性について，新東京病院中村淳先生には左主幹部症例における薬剤溶出性ステントの長期成績について御講演いただいた．また重症冠動脈疾患において薬剤溶出性ステントを用いたPCIとCABGの選択を如何にするかは診療現場で重要な命題であるが，これに関して京都大学循環器内科塩見紘樹先生よりCREDO-Kyoto PCI/CABG Registry Cohort-2からの知見として，日本における3枝疾患患者に対するPCIとCABGの長期成績を御報告いただいた．最後に帝京大学循環器内科上妻謙先生より多施設前向き無作為化試験（RESET試験）におけるEverolimus溶出性ステントとSirolimus溶出性ステントの1年追跡成績の比較を御報告いただいた．

薬剤溶出性ステントを用いたPCIの現状を理解した上で，より優れた薬剤溶出性ステント開発のための方向性を展望したい．